

山地古墳発掘調査報告書



1986年3月
出雲市教育委員会

はじめに

出雲市においても、ここ数年の開発は加速度的な状態で進行しています。それに伴って埋蔵文化財の発見や発掘調査もまた、増加の傾向にあります。

このたび発掘調査を実施しました山地古墳は、まさに、開発によって発見され、そして消滅していった典型的な例といえます。こうしたことは、将来にわたって過去の文化遺産を引き継ぐという、現在を生きている者の使命からすれば、本来許されるべきことではありません。

山地古墳が、やむを得ず開発によって消滅したことは非常に遺憾ではあります
が、この発掘調査によって貴重な考古学的成果が得られ、また、埋葬施設の一部
などを地元に移転保存できたことは、望外の喜びとするところであります。

本調査にあたりご指導を戴きました諸先生をはじめ、調査でお世話になりました皆様方にはその労に対し、厚くお礼申し上げます。

昭和61年3月

出雲市教育委員会

教育長 石 飛 満

例　言

1. 本書は、採土計画に伴う事前調査によって発見された山地古墳の緊急発掘調査の記録である。
2. 調査は、開発事業者矢野不動産の委託を受けて、出雲市教育委員会が昭和60年3月28日から5月11日まで実施した。
3. 調査体制は次のとおりである。

調査員 黒谷達典（出雲市立第2中学校教諭）

川上 稔（出雲市教育委員会社会教育課主事）

調査補助員 角田徳幸（島根大学専攻科学生）

手銭弘明（島根大学学生）

事務局 今岡清（出雲市教育委員会社会教育課長）

米海弘明（同 文化係長）

4. 方位は、図1、3、5を除く図については、調査時の磁北である。
5. 本古墳の出土遺物は、出雲市教育委員会で保管している。
6. 本書の執筆、編集は川上稔が行ない、遺物の整理等には、角田徳幸氏の協力を得た。
7. 調査にあたっては、山本清（島根大学名誉教授）、池田満雄（出雲市文化財審議会委員）の両氏から貴重なご指導を賜わったほか、神西小学校の教職員、児童をはじめ、地元の方々には、多大の協力を得た。

目　次

1. 調査に至るまでの経緯	1
2. 位置と環境	2
3. 調査の概要	
(1) 調査の経緯	6
(2) 外部施設	8
(3) 墓葬施設と出土遺物	13
4. まとめ	23

1. 調査に至るまでの経緯

出雲市神西沖町2,589番地の通称山地山の一角において、中古車オークション会場にするための採土工事に伴う事前協議が、昭和59年6月1日に提出された。それによって当該地を現地踏査したところ、丘陵頂部において、葺石と思われる河原石が多量に散乱した墳丘らしきものが認められたため、遺物は検出できなかったものの古墳と断定し、開発業者には遺跡発見届を提出するように指導した。昭和59年7月1日付で届出はあったが、発掘調査担当者が確保できなかつたため保留していた。

その後、発掘調査を黒谷達典氏（出雲二中教諭）が担当することになり、昭和59年12月に、丘陵頂部とそこから北へ伸びる尾根上に簡単なトレンチを設定して調査した。その結果、丘陵頂部に葺石を伴う小古墳1基が確認されたほか、北側尾根上のトレンチからも土師器の破片が少量検出された。本格的な発掘調査が開始されたのは、調査員の職務の都合上、春休みとなった昭和60年3月28日からであった。



写真1 山地古墳近景（北から）

2. 位置と環境

山地古墳は、出雲市街地から国道9号線を7km西に行った出雲平野の南西部に所在する。山地山と通称される標高28mの低丘陵上にあり、西の眼下には古代の「神門水海」の遺跡湖とされている神西湖が横たわっている。北方は、狭い沖積低地をはさんで、「出雲國風土記」の国引きの舞台となった白砂青松の出雲砂丘地（妙見砂丘）が北へ伸びている。東方の小浜山丘陵との間には、小さな沖積低地があり、南には中国山地から派生した丘陵が広がっている。

出雲平野での遺跡の初見は、繩文時代早期末の大社町菱根遺跡で、弥山山麓にある。繩文時代の遺跡は、原山遺跡、大社境内遺跡、三反谷遺跡など平野の縁辺部に存在していることが多いが、矢野遺跡で繩文時代後期の土器片が認められるなど、平野の中央部の旧自然堤防上に占地する遺跡も知られてきている。弥生時代になると、原山遺跡や矢野遺跡が前期から営まれている。中期後半になると、平野の中央部の旧自然堤防上に知井宮多聞院遺跡や天神遺跡などの大集落が突如として出現するとともに、矢野遺跡も集落が急激に拡大



写真2 山地古墳遠望（北西から）

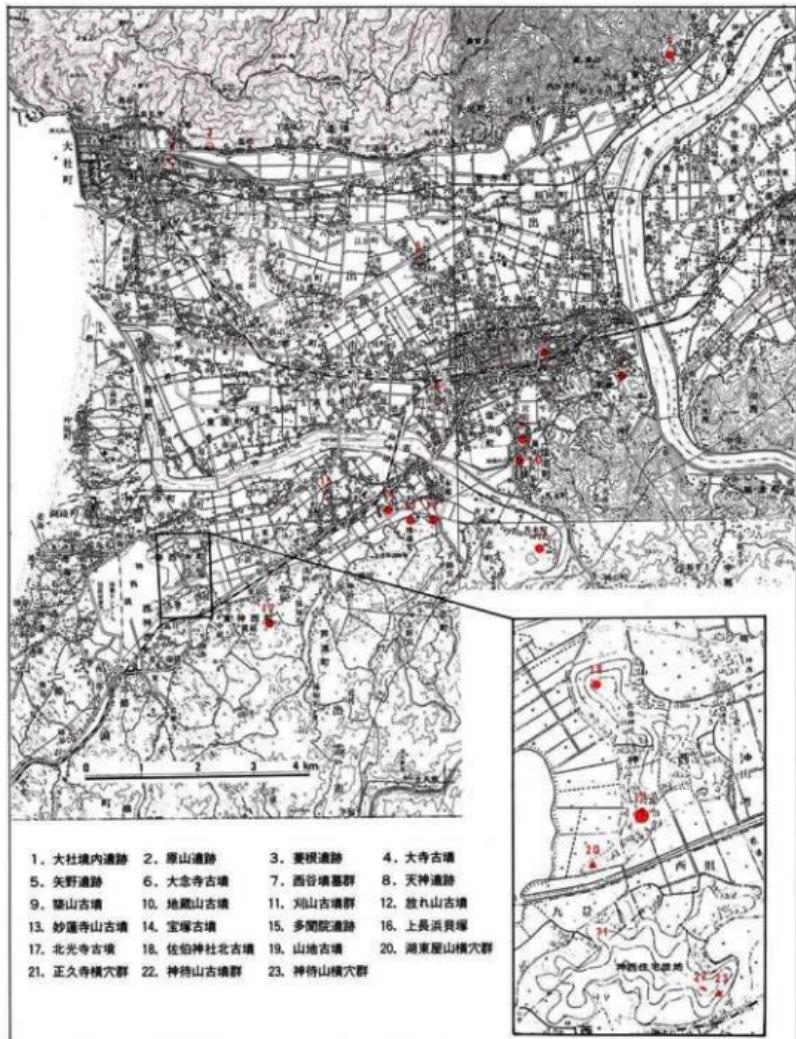


図1 山地古墳と周辺の主要道路

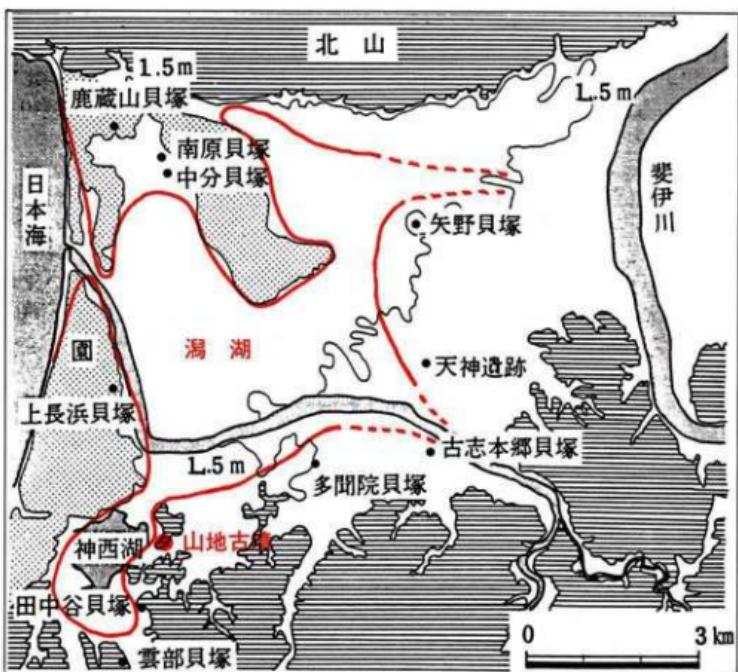


図2 古墳時代の古地理図（「鹿藏山遺跡」掲載図の一部を改変）

していく。古墳時代になると、それらの拠点集落は消失したり、急速に衰退していくという画期があり、また小遺跡は平野の縁辺部を中心として拡散していくという様相が認められる。

古墳は、一部を除いて、平野をとりまく丘陵の山麓にある。弥生時代後期の四隅突出型墳丘墓に代表される西谷墳墓群が斐伊川左岸の低丘陵に築造されてから中期の前方後円墳の大寺古墳までを繋ぐ時期の古墳として、山地古墳がある。西谷墳墓群が西部出雲平野の東端にあり、大寺古墳が対峙する位置の北山山麓にある。そして、山地古墳は最西端に所在する。こうした在り方は、それぞれの地域が、古代における交通の要衝にあり、そのことが古墳築造場所の選択に最も配慮されたことが窺われる。ところが、後期になると様相が異っている。大念寺古墳、塗山古墳などの県内でも屈指の大古墳が築造されてはいるが、それらは要衝にあるというよりも、むしろ斐伊川、神戸川によって形成された西部出雲平野の沃野が意識されている。前半期の古墳と後半期の古墳の立地には、明らかな変革があ

る。

山地古墳の周辺では、特に知られているものはないが、保知石谷の西の丘陵に所在する北光寺古墳は、全長60m近い古墳であり、全容が判明すれば注目される可能性がある。総じて、この地域には小規模の古墳が多いが、出雲平野のなかではやや古い様相をもっており、興味深い。

出雲平野には、現在9カ所の貝塚が知られている。大別すれば、出雲砂丘地に鹿嶋山貝塚、南原貝塚、中分貝塚、上長浜貝塚があり、平野の旧自然堤防上には、矢野貝塚、古志本郷貝塚、多聞院貝塚がある。さらに、神西湖に眺む地に、田中谷貝塚、雲部貝塚が存在する。その多くは、ヤマトシジミを主体とする貝相を示している。古墳時代の前半期に該当する貝塚では、多聞院貝塚がある。1958年に明治大学によって行なわれた発掘調査での貝層の観察によれば、古墳時代には既に入海から潟湖に変貌していることが推定される。山地古墳が築造された頃には、「出雲國風土記」に記載する「神門水海」が、山地古墳のある丘陵下まで迫っていたことはほぼ確実で、山地古墳の被葬者が、おそらく出雲平野の西口を守ると同時に、当時かなり重要視されていたと思われる内海航路を把握していたであろうことは、十分に考えられる。



写真3 山地古墳から神西湖を眺む

3. 調査の概要

(1) 調査の経緯

発掘調査は、昭和59年12月のトレンチ調査を受けて、昭和60年3月27日から開始した。尾根筋に検出された土器片は、トレンチを部分的に拡張した結果、大きな壺棺とすぐ南に寄りそうようにして直立した古式土師器が一つの墓壙から出土した。

葺石をもつ山地古墳は、当初径10m程度の古墳と推定していたが、西側に検出された石列を調査していくうちに、それが西限の墳裾のものだということが確認され、径20mを超える古墳であることが判明した。古墳の西側と北側の墳丘が大きく流出しているほか、墳頂部の第1埋葬主体と第2埋葬主体の西端の礫群も、当初は葺石の一部と感違いをするほどであった。

調査中には、地元の神西小学校の先生や児童が殆んど毎日のように調査の手伝いや勉強に訪れて、有意義な一面もあった。調査は、昭和60年5月11日に終了し、やがて古墳は開発により消滅したが、昭和60年6月22日には、神西公民館で古墳説明会を開催した。





图3 地形测量图

(2) 外部施設

山地古墳は、通称山地山の南西部にあり、丘陵尾根の最高所（標高28m）に所在する。墳丘は、第四紀更新世の脆い土層を基盤として築成されており、極めて崩れやすい土質である。

墳頂部に基準点を据え、十字状に第1、2、4、5トレンチを配置した。さらに対角方向には第3、7トレンチを設定したほか、北西部に任意の第6トレンチを設けた。また、尾根筋では、北側に第8トレンチを設定し、西側には第5トレンチの延長方向に更に西へ20m配置した。

第1～7トレンチが山地古墳の墳丘に伴うトレンチである。第1トレンチは、 $0.5 \times 7\text{m}$ で、 0.1m の表土層の下は暗褐色砂質土の薄層があるので、すぐ地山の灰白色砂質土に達し、墳丘がかなり損われている。第2トレンチは、古墳築成時には近く、墳丘の保存状態が最も良い。表土下は、この古墳の盛土である暗褐色砂質土層で、層厚は $0.2 \sim 0.5\text{m}$ であり、地山である黄褐色砂質土及び灰褐色砂質土がその下に続く。第3トレンチでは、すぐに葺石が露出したが、葺石下の土層状態は確かめていない。第4トレンチは、墳頂部の



写真5 山地古墳墳丘(西から)

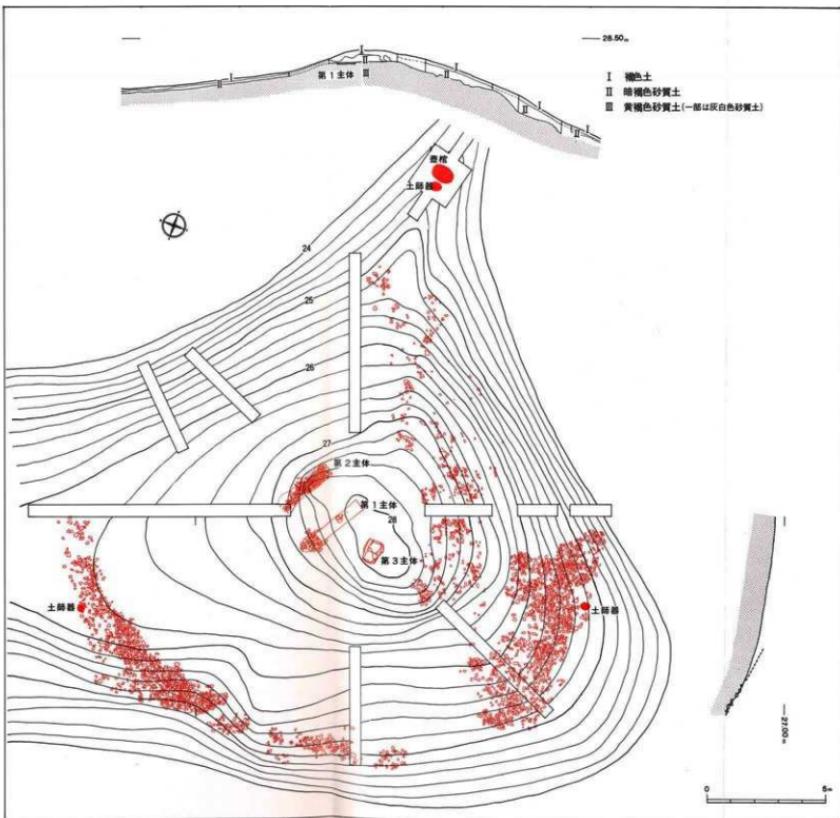


図4 塗丘実測図

南側の長さ8mのトレンチで、調査前からかなり大きく抉られたような状態であり、すぐ地山面が露出した。葺石も墳裾部に僅かに残っているに過ぎない。第5トレンチは、墳頂部の西方向に11mのトレンチを設定したものだが、第1、4トレンチと同様に墳丘が大きく損われており、すぐに黄褐色砂質土（地山）に達する。西端では、僅かに葺石が検出されている。第5トレンチの延長方向に配置した長さ20mのトレンチにおいても、すぐに地山が露出し、遺構、遺物、葺石は全く検出できなかった。また、第5トレンチの西端付近を南斜面にかけて任意のトレンチを設け、葺石列が西に続いていないことを確かめている。第6トレンチは、大きく崩れた北側斜面に葺石を検出するために設定したが、全く発見できなかった。第7トレンチは、第3トレンチの対角方向のトレンチであるが、ここでもすぐ地山面が露出した。

また、山地古墳に伴うトレンチのほか、北側の尾根筋には第8トレンチを設定した。幅0.5m、長さ8mの規模だが、このトレンチの南寄りで土器片が出土したため、2×2mの範囲に拡張し、のちにそれが壇棺であることが判明した。

開発に伴う事前現地踏査の際には、葺石をもつ徑10mの古墳で、おそらく木棺直葬のものであろうと推定していた。しかし、第8トレンチからは予期せぬ壇棺が出土し、第5トレンチの西端からは葺石らしきものが検出された。

葺石は、当初1m軸で南へ3mほどゆるく弧を描くようにして斜面をおいていく状態であった。それが南斜面の調査によってはじめて葺石であることが判明し、また、それによって、かなりの土砂が流失し僅かに墳裾にのみ葺石が残存していることがわかった。北西側では、全く葺石は検出できなかったが、南東側の残存状態が良いところでは、ほぼ墳丘全面に葺石が認められ、築成時には、墳丘全面が葺石に敵われていたことは想像に難くない。

墳丘が大きく損なわれているために築成時の墳丘規模は推定し難いが、残存している葺石の状態と埋葬主体の位置関係からみると、徑24m、高さ4mの規模が想定される。

墳形については、葺石のうち、南側と南東側の墳裾部がどちらもほぼ直線状になっていたため、方墳の可能性も考慮したが、埋葬主体の主軸方向とは明らかにズレがあることと方墳にあるべき対角方向の稜が認められなかっただため、円墳と推定される。

そうしてみると、山地古墳は、外部施設として葺石をもち、徑24mというかなりの規模を有する円墳ということになる。さらには、北側の墳裾から3.5m離れている壇棺墓も、おそらく山地古墳と深い関係があるものと推定される。



写真6 莢石状態（南東側）



写真7 莢石状態（南側）

(3) 埋葬施設

山地古墳の埋葬施設としては、墳頂部に第1埋葬主体、第2埋葬主体、第3埋葬主体がある。また、古墳北側の墳裾から3.5m離れた位置に、壺棺と古式土師器を埋納した土壙がある。その他にも、埋葬に伴うものかどうか明らかではないが、西側と東側の墳裾部に埋置された土師器（上半部を欠く）が検出されている。

墳頂部は、調査前に既に封土がかなり流出していたが、幸いにも埋葬施設は下底部が残存していた。第1埋葬主体と第2埋葬主体は西端が地表に露出しており、当初葺石と推定していた礫群は、埋葬主体に伴うものであることが、後日判明した。

第1埋葬主体と第2埋葬主体は、主軸方向がほぼ同一で、N25°Eとなっている。しかし、第3埋葬主体は、ほぼ真北を主軸方向とし、両者には、明らかな差異が指摘できる。また、第1埋葬主体と第2埋葬主体との距離が1.5mなのに対して、第1埋葬主体と第3埋葬主体は、近いところで1.1m、遠いところで1.6mである。埋葬主体間の距離はほぼ等しいが、主軸方向において第3埋葬主体のみがズれており、また、埋葬主体の大きさや性格からみて、第3埋葬主体のみが異質のものと推定される。

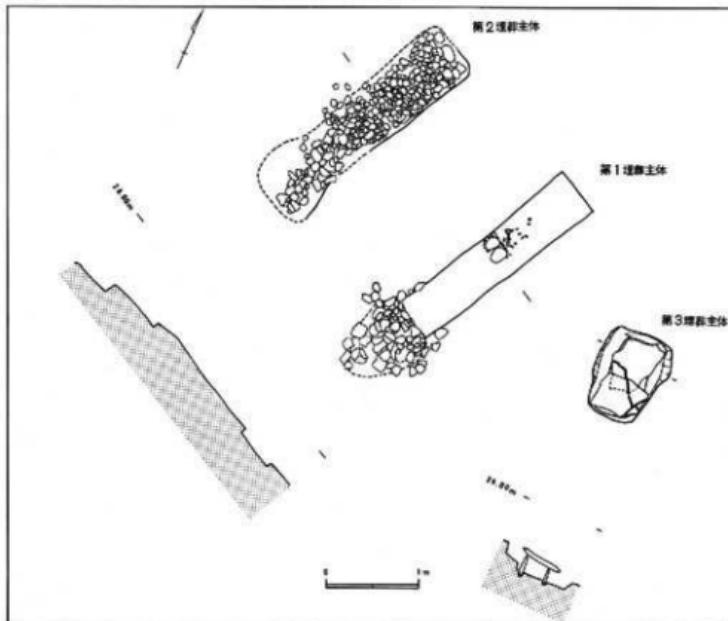


図5 墳頂部三埋葬主体実測図



写真8 第1、第2埋葬主体（南西から）

第1埋葬主体

最初に検出した埋葬主体であるが、実質的にも山地古墳の中心主体といえる。当初、西端の砾群を葺石の一部とみていたが、埋葬主体の一部であることが判明し、墳丘がいかに大きく損われていたかがよくわかる。

第1埋葬主体は、第2埋葬主体と主軸が同一方向にあり、N25°Eを示している。墓壇は素掘りで、西端に砾群がある。墓壇の幅は、北東側が55cmでやや広く、中央部が50cm、南西側で48cmとなり、北東側にいくにしたがって僅かではあるが少しづつ広くなっていく。墓壇の長さは、西端の砾群を除けば2.3mで、含めて考えると0.9mほど長くなる。墓壇の深さは現状では5cmであるが、土層面での観察では、少なくとも10cmは深かったことが推定できる。墓壇内の東端部付近からは、木棺を安定させるために使用したと思われる白色粘土の小塊が検出されたため、おそらく墓壇内に木棺を直葬したものと推定される。ここで注目したいことは、石枕として利用されたと思われる二個の大砾が中央部に存在することである。二個の砾は、北側のものが、13×18cm、南側のものが、14×20cmとほぼ同じ大きさのものである。それぞれ一方を平らにして並置し、形状的にみても石枕にみえる。また、

北側の礫の西から北にかけての周囲を、3~5cmの薄い小礫7個をはさんで大礫を固定させている点は、この礫が無造作に置いたものでないことを明確に示している。しかし、ここで問題になるのが、木棺直葬との関係であろう。墓壙東端から検出された白色粘土小塊は、木棺の存在を示しているが、中央部の石枕に小礫を斜めにはさみ込んで安定させているという点からみると、木棺には底板がなかった可能性が大きく、組み合わせ式の木棺と推定される。もう一点、この埋葬主体で触れておきたいことは、西端の礫群の存在である。墓壙の西端の1×1mの範囲に広がっていて、一部は墓壙の長辺の縁辺部に沿って置かれていた。しかし、それは東まで続かず、礫が抜かれた形跡もないので、墓壙周囲を繞っていた可能性は殆んどない。礫群は殆んど河原石で構成され、扁平な海浜礫も多少含んでいる。大きいものは径20cm程度のものもあるが、径10cm前後が多い。礫群の断面をみるとよくわかるように、墓壙西端から深く抉るようにして35cm落ち込んでやや浅くなりながら西に向かっている。つまり、深い土壌を掘ったのち、その中に礫を多量に入れている。この点は第2埋葬主体にも共通する手法である。結論的にいうならば、この礫群は、ある意味での排水施設と考えられる。墓壙内の底面のレベルはほぼ水平であるが、中央部の石枕のレベルが、礫群の方よりも若干高くなってしまっており、また、地山の土は多少崩れやすい土であ

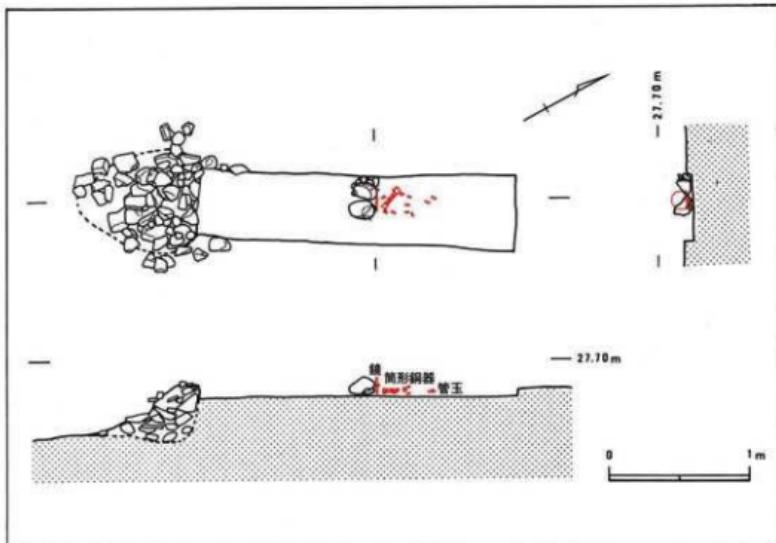


図6 第1埋葬主体実測図

るが、礫群を墓壙の補強としての施設としてみるにはあまりにも不自然であり、排水のための施設とみた方が納得しやすい。

また、埋葬方位にも特徴がある。墓壙の中央部に石枕が据え置かれていることは既述したが、ここに被葬者の頭部を置き、足を西に向けると、距離的にみて、1.2 mしか余裕がない。これは、どうみても伸展葬では幼児しか考えられないが、第2埋葬主体を考慮すると、子供が被葬者とは考え難い。むしろ、仰臥屈葬の大入を葬ったと考えたほうが説明しやすいが、なぜそうした葬法をとる必要があったかが疑問点として残る。

第1埋葬主体は、副葬品としての出土遺物はそう多いとはいえないが、島根県内で初めて発見された筒形銅器を含む点で異彩を放っている。出土遺物は、筒形銅器1点、青銅鏡1枚、碧玉製管玉17個、鉄製品1点であった。これらの出土位置は、石枕の東側の狭い範囲に一括して納置されていた。木棺の底板がおそらくはなかったであろうことは既に述べたが、これらの副葬品のレベルをみると、底面から2 cm以上高い位置から出土していることからみて、本来、一括して木箱等の容器に入れて被葬者の枕もとに置かれていた可能性がある。一部、石枕の下へ入り込んだ状態で出土した管玉もあるが、これは容器が崩れたときに移動したものであろう。ただ、青銅鏡については箱外に垂直に立てかけてあった可



写真9 第1埋葬主体遺物出土状態(南東から)



写真10 第1埋葬主体出土遺物
(左 筒形銅器 右 二神二獸鏡)

能性もある。

筒形銅器は、長さ14.2cm、口径2.5cm、底径3.2cmの大きさのものが1点出土している。断面は円形で中空となっているが、底部のみが塞がって扁平になっている。上下二段の四方に計8カ所に幅0.3cmの細長い透しが配されており、その間には幅1.2cmの突帯がある。口から2cm下に目釘穴が反対方向のものと合わせて2穴存在している。また、中空の内部には、径1cm程度の円碟が入っていた。山田良三氏の分類によれば、第二類(中間有帶式)の筒形銅器ということになる。

青銅鏡は、径12.6cm、縁厚0.4cmの二神二獸鏡である。仿製鏡であるが、鋳上りは良好である。鏡背部の文様は鮮明で、神像、獸形のほか、幾何学文や櫛齒文を配している。青銅鏡は、垂直に立った状態で出土しており、本米、そうであった可能性も強い。

碧玉製管玉は、17個が確認されており、大きさは長さ2.0~3.5cm、幅0.3~0.8cm、色調は淡青緑色~深緑色と差異はあるが、いずれも穿孔は両側から行なっている。これらはおそらく紐を通して一整きのものであったと思われる。玉類では、管玉以外の副葬はない。鉄製品は1点だけ出土しているが、形状不明品である。

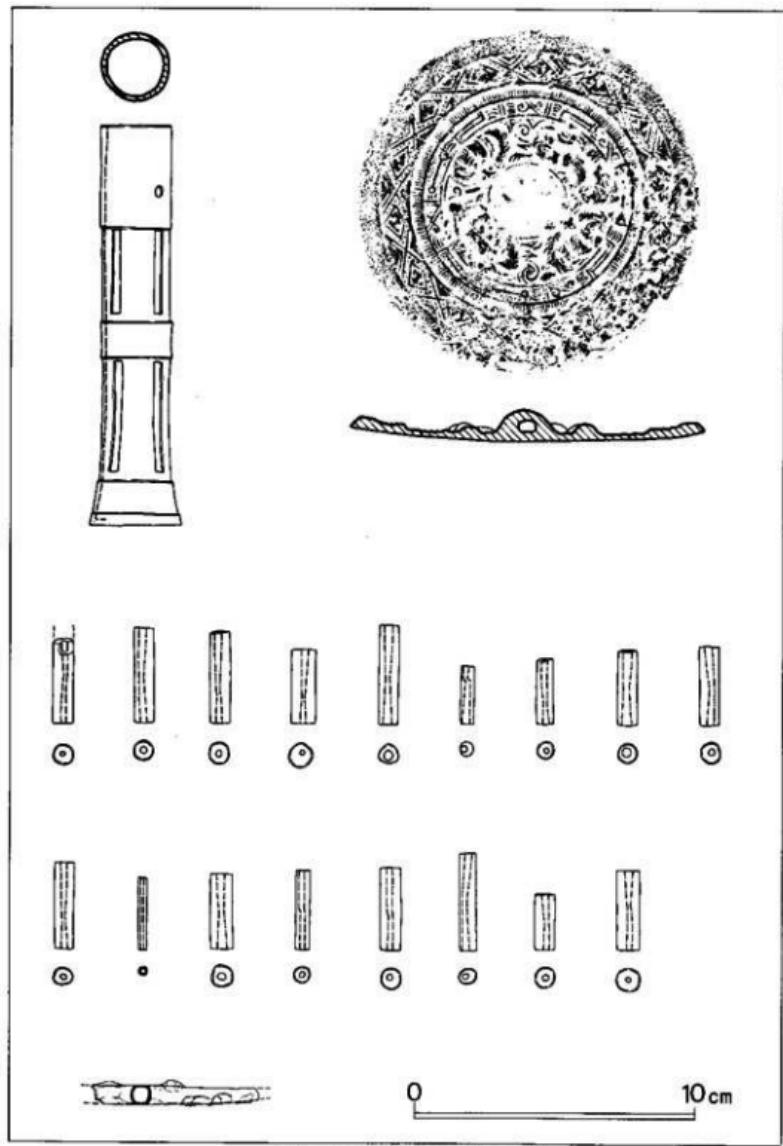


图7 第1号墓主体出土物实测图

第2埋葬主体

第1埋葬主体の北1.5mに主軸方向を同じくして並置する。墓壙の底面のうち、北側が部分的に崩れていた。第1埋葬主体と同じく、西端の礫群が調査前から露出しており、また主体部の上には大きな松の根があったため、土層の確認はできなかった。第2埋葬主体は土壌の中に礫床を設け、木棺を安置したものと推定される。現状からは、10~20cmの側壁面の立ちあがりが確認できた。また、第1埋葬主体と同じく、東端付近において、白色粘土が薄い帯状に検出され、木棺を安置していたことがわかった。

礫床は、幅0.6~0.7m、長さ2.6mであるが、最東端を除き、東から1.4mを径5~10cmの薄くて丸い海浜礫を横にして用い、西側は、河原石を使用している。断面をみるとわかるように、海浜礫は、10~15cmの厚さを3~4重にしているが、西半分では、径10~15cmの比較的大きな河原石を厚さ30cmに充填している。礫床は西に向かってゆるく傾斜していることから、排水施設の感は一層強い。

副葬品は、礫床の中央部付近から青銅鏡1枚と筒形銅器1点が出土している。青銅鏡は径8cm、縁厚0.3cmの小形仿製鏡で、鏡背に珠文二列のほか、櫛齒文、鋸齒文を配した珠文鏡である。出土したときには、礫にはさまっていたような状態であったが、これは、木棺が腐

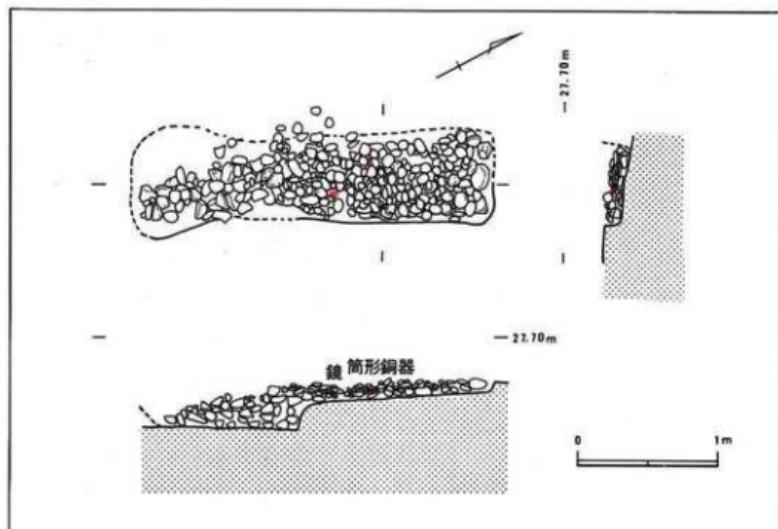


図8 第2埋葬主体実測図



写真11 第2埋葬主体遺物出土状態

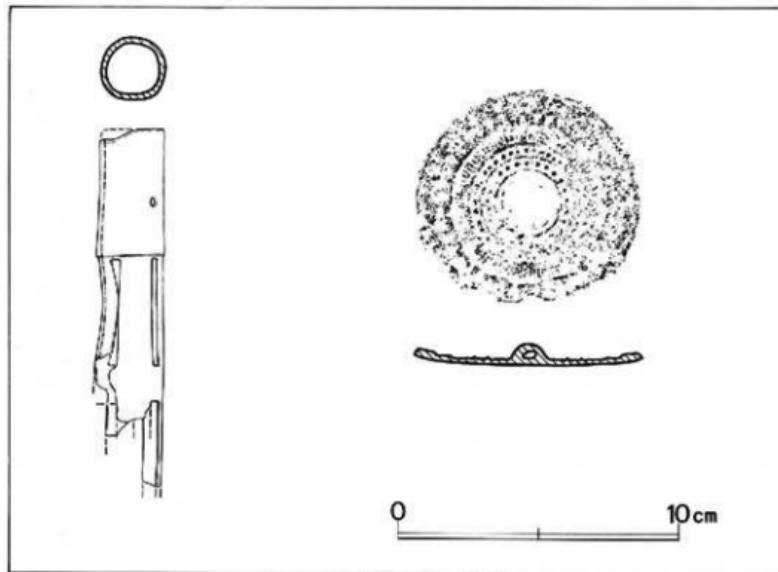


図9 第2埋葬主体出土遺物実測図

蝕したのちに移動したものと思われる。青銅鏡のほかには、筒形銅器が1点出土している。底部を欠いているが、現存長12.5cm、口径2.4cmで、口から2.5cmの位置に目釘穴が2穴ある。かなり変形はしているが、四方に二段の透しをもつ中間無帶式の筒形銅器と思われる。第1埋葬主体の筒形銅器にくらべると、簡素な造りとなっている。

第1埋葬主体が木棺直葬の埋葬形態であるのに対して、第2埋葬主体は磯床であるが、副葬品において、青銅鏡、筒形銅器を各1点出土するなど、共通点が多く認められる。

第3埋葬主体

埋葬主体のうち、一番南側から検出されたものである。調査前には大きな松の根があつたため、層序は明らかにはできなかった。掘形は、東西が0.6~0.8m、南北が1mで、中段にテラスを設けた二段掘りとなっている。底径は、0.4×0.9mで、ここに板石を組み合わせた箱式石棺を設けている。内法は、幅0.25m、長さ0.7mのかなり小形の箱式石棺で、板石は、小口が各1枚、西側壁が2枚、東側壁が3枚で構成され、蓋石は、大きい石2枚で構成されている。また、下底は、地山のうえに5cmの厚さに砂をおおい、その上に径1~5cmの小砾を一面に敷いている。遺物については、全く検出できなかった。

第3埋葬主体は、第1、2埋葬主体とは主軸方向がズレているうえ、主体部の大きさな



写真12 第3埋葬主体(南東から)

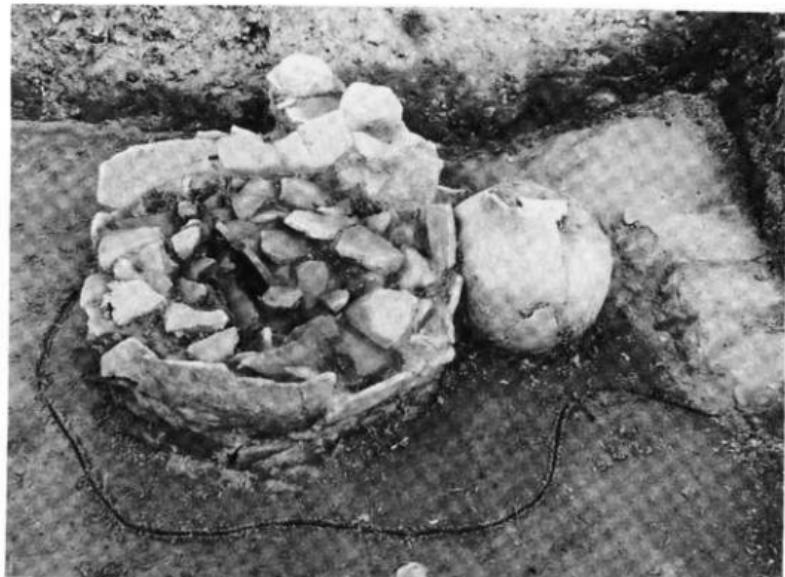


写真13 墳壙外壺棺（西から）

ど性格を異にする面が強く、山地古墳が築成されたのちに、被葬者と関係の深い者が追葬されたものであろう。

壺 棺

山地古墳の北側墳裾から3.5m離れた尾根筋に、壺棺と古式土師器が出土した。壺棺と古式土師器は、 $0.75 \times 1.1\text{m}$ の土壙の中に南北に並置されていた。北にある壺棺は、上半分が破碎されて原形をとどめていなかったが、下半分は残存していた。それによると、壺棺は口縁部がやや外反した複合口縁をもち、張った肩部には、幅1cm、高さ2cmの突帯を繞らせてている。壺棺の中からは、下底部に挙大の碟が8個認められた。碟は、壺棺の口を塞いだ木蓋を押さえていたとみるよりも、残存部から推定した壺棺の埋納角度が、水平面から $35\sim40^\circ$ の斜位に埋置されていたことからみて、当初から内蔵されていたと考えたほうが妥当と思われる。

古式土師器は、かなり脆い器高30cmの壺で、複合口縁をもち、胴部が丸く張り壺棺に寄りそうようにして、直立していた。

4.まとめ

山地古墳は出雲平野で初めて明らかになった前期古墳である。墳丘は旧状がかなり損われていたが、径24m、高さ4mの円墳で、全面に葺石を有し、墳裾部西側及び東側に土師器を埋置していた。

埋葬施設は第1埋葬主体が木棺直葬、第2埋葬主体が疊床を有する木棺、第3埋葬主体が箱式石棺と、その形態は各々異なっていた。しかし、前2者は組み合せ式木棺を使用し、墓壇の一方の端に疊群を使用した特色ある排水施設を設ける等、共通性も認められる。また、後2者も棺の材質こそ異なっているが、疊床を有する点では同様な手法を用いている。

出土遺物では、第1、第2埋葬主体から検出された筒形銅器が注目される。県内では初見のもので、近隣では鳥取県で生山古墳等2例、広島県で亀山1号墳等3例が出土しており、全国では50例余りが知られている。これは、従来、杖頭あるいは石突として杖に装着されたものであるとか、内部に小棒や管玉を入れて響音を出すものという用途等が考えられている。本古墳の第1埋葬主体出土例の場合、内部に円環のあることが確認されており、その検出状況からみても、後者のように使用された呪術的意味ある強いものであることが考えられる。

銅鏡も第1・第2埋葬主体の両者から出土している。いずれも小形仿製鏡であるが、1古墳から2枚の鏡の出土は、県内では鹿島町奥才14号墳と共に、安来市造山1号墳の3枚に次ぐ枚数である。

第1・第2両埋葬主体の副葬品は筒形銅器、小形仿製鏡、各1で同じ内容を持っている。しかし、前者の筒形銅器は中間有帶式、鏡は二神二獸鏡、と造りの丁寧なもので、これに管玉、鉄製品を伴なっている。このようなあり方から考えると、本古墳の中心主体は第1埋葬主体であるといふことがいえるであろう。

古墳築造の時期は、筒形銅器や小形仿製鏡の副葬という点から見れば、中期的な色彩も窺える。しかし、本古墳とかかわりがあると思われる墳丘縁辺の壺棺が、概ね小谷式の範疇で捉えられることから考えると、やや早い時期、即ち、古墳時代前期末に築造されたものと思われる。

山雲平野では西谷墳墓群で弥生時代後期の墳丘墓の様相は明らかになってきているが、これに続く古墳時代前期の古墳のあり方は未解明であった。この空白を埋めるのが山地古墳で、その被葬者には平野西部の交通の要衝にあって、おそらく内海航路を押えていた首長の姿が想定される。

注：（1）山田良一「筒形銅器考」（古代学研究 第55号1968）

（2）山田良一氏の教示による

昭和61年3月22日 印刷

昭和61年3月27日 発行

山地古墳発掘調査報告書

発行 出雲市教育委員会

印刷 株式会社 武水印刷